国際言語文化研究所プロジェクト A1 研究所重点プログラム
「文化の移動と紛争的インターフェース／ジェノサイドと奴隷制の問題」
トラベルライティング「外地巡礼の試み」

「外地巡礼」という思考の試み

中川成美

文学が人間の内面を照らし出す装置だとすれば，そこで用いられる言語は重要な働きをする。人間の思考が，おのおのの用いる言語によって支えられているのは勿論だが，その言語そのものが持つ独自の思考のルールが，その思考の内部に深く浸透しているからである。だが，「母語」という概念で自らを支えていると思われるそれぞれの言語は，一方には状況の中で絶え間なく変化し，揺れている。例えば標準語に対する方言，女性語など性差によって使い分けられる話し言葉，あるいは植民地における宗主国の言語侵入など，挙げだせばきりがない。

いま，文学は日本文学とか英文学，仏文学，中国文学，韓国文学などと切り分けられて分類されている。図書館分類を引くまでもなく，これはこれで便利な規則である。だが，この各国文学の概念に収まり切れない文学が数多存在することも事実だ。またその各国文学の分類の中でも，地方語や周縁言語のように，国民国家が標榜する「標準言語」とは違った言語で書かれた文学も無理やりに含みこまれてしまっている事例も多くある。特に 20 世紀以降の異常なまでに激しい人間の移動によって，言語も変質を迫られているのだ。これは言語使用者の自由な意思によるのだとだけ考えるのではなく，戦争や災禍，貧困や偏見によって絶え間なく移動を強いられる人間の問題として考えなければならない。それは確実に文学を生み出す母体となっている。

この言語的に文学的に「混交」した状態を，私たちはどのように考えればいいのだろうか。一国の「純粋」な言語で書かれるべき文学の「混濁」と考えるべきなのか，それとも一国の「混濁」した状況を写し出して，世界が共有すべき問題を提示した文学とみるべきなのかは，それを読む人間の存在の在り方にかかっている。単純に「世界文学」などという呼称を与えて，読者の安全な場所を確保するほどには，世界の状況は単純ではない。

第 70 回読売文学賞を受賞した西成彦著『外地巡礼―「越境的」日本語文学論』（みすず書房，2018 年）は，この多層的・多重的に構築された「日本語文学」の現在をあますところなく描いた評論集である。巻頭に置かれた「日本語文学の拡散，収縮，離散」で西は，「日本語文学」の諸相を整理している。まず，北海道を拠点とする「外地と先住民族文学」，近代以降の日本の「大陸進出・南方進出」，日本人のハワイやアメリカ，ブラジル，旧満州国への移民によって担われた「海外移住地の文学」，第二次大戦の敗戦による引き揚げによってうまれた「引き揚げ文学」，沖縄を拠点とする「沖縄文学」，外国移民の定住化に伴う「日系文学」，第二次大戦後に日本に定住した旧植民地の作家によって書かれた「在日文学」と，7 つの「日本語文学」を挙げた。こ

れに非日本語母語作家による日本語で書かれた文学を加えれば，今，日本語文学が立つ場所が見えてくることになる。

おそらくは「正系」の日本文学史では，わきに追いやられるであろう「傍系」の日本文学が持つ甚大なエネルギーに注目した西が主張するのは，追いやられたものの「復権」や「再評価」ではない。歴史的な問題としてなぜこの文学が出現したかを問い，なおそれがどのように他言語の文学と共鳴しあい，問題を共有していくかに彼の興味は集中する。ポーランド文学を専門とする比較文学者としての西が興味を注ぐのは，イデッシュ文学がまさしく「拡散，収縮，離散」を繰り返しながら，新たな組み換えの中で生成していったように，その可能性と不可能性を自らの言語である「日本語」で思考するという試みであった。ここでもたらせるべきは，その重なり合いを分け入って旅する意思である。それを西は「巡礼」と名付けた。宗教的なその言葉の奥底には，まだ見ぬものへの多大なる興味と，それに出会うことによって得られる感動が隠されている。

2011 年の東日本大震災，それに続く福島原発事故以降の日本が，もはやそれ以前の日本とは截然と切り離されてしまったことは，明らかな事実である。だが，それを隠ぺいするかのようにオリンピックやエクスポ誘致に見られる「一つの日本」（ワンチーム）への空虚な掛け声が私たちの生活を覆っている現状は，深刻である。地震被災地やフクシマの原発被災地を追われた人々に与えられた過酷なまでの流離の現実は，まさしく西が指摘する「外地巡礼」そのものである。とすれば，この「外地巡礼の試み」は，「もう一つの日本」の可能性を考える手立てなのかもしれないし，世界を席巻する排外主義や自国優先主義，民族差別や人種偏見に抗していく手がかりともなるであろう。

本小特集はこうした観点から編まれた。今回は上海と沖縄への「巡礼」であるが，他の土地へと拡散，収縮，離散された人々をより多様に取り上げて考えていきたいと考えている。なお，本特集は本年度をもって退職する西成彦教授を記念するものでもある。これまで国際言語文化研究所の所長として，また運営委員，企画委員として多くの銘記すべきコンファレンス，研究会を組織してきたことにも深く感謝したい。そして，本特集のように今後も粘り強く継続すべき試みの発案者，推進者として，ますますの尽力を乞うて，本特集の趣旨説明としたい。